

## ボードをめぐる諸問題

森林資源事情と合板原料である外材丸太の輸入状況の変化から、北海道においてもボード工業をもう一度見直す時期に来ていると思われます。この意味からパーティクルボードとファイバーボードのこれからについて、日本の草分け的経営者である長島隆氏と会田徹氏のご両名に、新春早々の1月上旬林産試験場で数々の示唆あるお話を聞かせていただいた。当稿は、講演していただいた内容を収録し、編集者が要約したものです。

### 資源転換期をむかえたボード工業 - ポスト合板とボード工業 -

元日本ハードボード株式会社副社長  
長 島 隆氏

#### § はじめに

本日は、お招きを頂きまして、御専門にやっていらっしゃる皆様の前で、いろいろ申し上げることになりましたが、非常に恐縮しております。

さて、日本ばかりでなく、世界的にも、オイルショック以来、大転換をしなければならぬような状況になっていると思います。

私の従事しておりました日本ハードは、25年前の設立の基盤を考えますと、当時合板廃材は燃料にして燃やしていた訳で、「それではもったいない」と、その廃材を原料にしてハードボード工場が建設された訳です。その後25年たって、合板工場では、廃材をまた燃料にするようになり、昔の姿に戻ってきております。

ハードボードは、自動車関係で”ごやっかい”になっておりますが、ちょうど、私がはじめてアメリカ、ヨーロッパを回った頃は、日本車の輸出がはじまった頃でした。その当時、日本車は、あのサンフランシスコの坂を登れなかったと、現地の人にきいておりました。

いまでは、アメリカ、ヨーロッパへどんどん輸出しており、逆に、アメリカより農産物を輸入するというように、すっかり、逆転してしまうような状況になっております。

#### § 丸太の輸入は？

そのようなことを考えてみますと、「油」「丸

太」「食糧等の資源について、大きな変化がでくるとは思わないかと考えられ、これから10年の変化は、これまでの30年の変化よりも相当大きいのではないのでしょうか？

そのような中で、どの様に対処したら良いのか、それらの大転換の中の一つとして、ラワン合板のことが考えられます。

合板は、4mm換算で20億m<sup>2</sup>の生産量であります。それに対して、パーティクルボードが、5～6千万m<sup>2</sup>、ハードボードが、3～5千万m<sup>2</sup>と、その生産量において、合板とハードボード・パーティクルボードの比は、“横網と、ふんどしかつぎ以下”の開きがございます。

私の考えでは、合板は非常にすぐれた商品であると思いますが、日本でこれだけ大きく発展できたのは、ラワン丸太が十分供給されたからだと思います。しかしこれからは、ラワン輸出国であるインドネシアは、フィリピンとは異なり、資源も豊富であり、さらに産油国でもあるため、保安材として、ラワンの伐採はひかえる方向に進むと考えられます。

現在、インドネシアでは、24の合板工場が、稼働中であり、これが将来的には80～90（日本は、220～230）工場になると言われており、日本へは合板なり、製材なりの商品としてのみ、輸出するようになると思います。

合板の市場は、建材、家具、弱電、音響、土木と広い範囲に使われてきましたが、これが、丸太が入ってこなくなった時に、また1割でもかわったら、どのようなことになるのでしょうか？

日本の場合は、合板がこれだけ広範囲に使われているため、パーティクルボードや、ハードボードは、非常にかぎられた市場で“しのぎ”をけず

ってまいりましたが、今後は新しい市場がでてくると考えられますし、ポスト合板ということをも、真剣に考えなければならぬ時期にきていると思います。

### § ポスト合板

そこで、ポスト合板の“一番手”は、パーティクルボード、ハードボード類と考えられますが、これらも、資源から考えると、大変なことになると思えます。

私の勤めておりました日本ハードでも、原料は、臨海の製材工場の廃材を使わせていただいてまいりましたが、今これらの工場は四苦八苦で、これからさらに、製品輸入でも始まりますと、原料がなくなるような状況も考えられます。

そうしますと、資源的には、日本の山をもう一度見なおすこととなります。

林野庁の出している数字によりますと、国内の木材の消費量は、昭和51年は1億4千万 $m^3$ 、71年には1億3千万 $m^3$ になると、推定されております。

それに対して、国内産は、51年には3千8百万 $m^3$ 、61年が4千6百万 $m^3$ 、71年は5千7百万 $m^3$ 程度となると、推定されておりますが、それでもせいぜい、全需要量の半分程度しか自給できない状態です。

さらに、ある本によりますと、「将来、日本のパルプ製材用の原木は、ソ連とカナダから供給されるだろう」、そして「東南アジアからの丸太の輸入は不可能」と書いており、王子製紙の社長は、ことしの新年の年頭あいさつとして、「資源を得るためには、北米、カナダで資本参加、または提携、そして東南アジアでは造林をすすめなければならないだろう。」と述べております。

原料事情は、それぞれの地域によって異なると思いますが、これからは東南アジアの原料をあてにするのではなく、国内の山と、国内の市場との間で、どのような製品を、どれ程の規模で、どのような手段で作るかを考えていかなければならないと思います。

### § 石油は？

さて、エネルギーの問題ですが、ボード産業は石油製品である接着剤も含めて、エネルギー多消費型産業であり、このまま新しい技術開発をせずつにおれば、大幅にコストアップして、市場に受け入れてもらえなくなるのではないかと心配しております。

私共は、製品を使っていたいておる大工さんと良くお話をするんですけども、大工さん方から「そんな高くなるのなら、またもとの土壁にしようか？」などという話もでて、背筋が寒くなったこともございます。

でも現時点では、ボード産業は、丸太が値上りしたことで助かっております。というのは、油が上がることによりボードも値上がりしましたが、その分合板も上がっているからです。もし、丸太の値上がりがなかったとすると、本当にハードボードでなければならぬところにしか使われないということになったと思います。

### § 地場に立地する企業として

ポスト合板として、新しいボードなり、ボード工場を考える時、公害処理と、運賃のコストが特に重要になってくると考えられます。特に都市の中では、排水処理設備に数億の投資と、年間数千万の費用がかかります。

ついで運賃ですが、これもばかになりません。特に現在運賃が上がっており、運賃の軽減のためには、市場に近いことが必要になってまいります。そのためには、その市場のニーズを日常的に調べ、つみかさね、それを会社の資産とする心構えが必要です。

さらに、地域で自己完結するような森林利用システム(図-1)を確立することが必要で、その中で、ボード産業が地場産業として位置づけされていくと考えられます。

地場産業というと、なにか“かっこうが良くない”ように思われますが、セールスマンが出張して商品の説明するよりも、社長が直接行って説明する方が、よっぽど説得力があるんです。

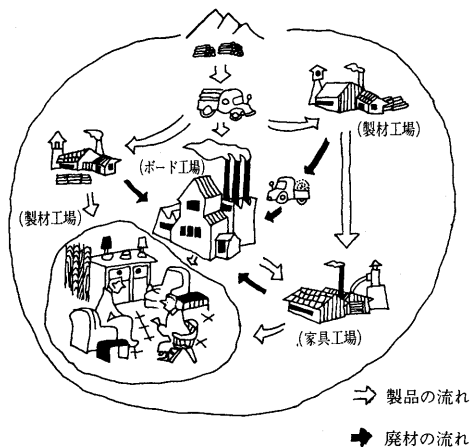


図-1 地場産業のシステム

### § 他材料との組み合わせ

いろいろととりとめないことを述べてまいりましたが、最後に、これらの大転換期をむかえ、林産業としてどうすれば良いかということです。

基本的に考えてみると、資源と原料があり、そして市場があり、その中間に工場があるというよ

うな縦の系列が考えられますが、もっと横に広く見てはどうかということを申しあげたい。

それは、いまの建材、家具関係だけでなく、市場をもっと広くみてはどうかということです。そのことによって、木材のみでなく、プラスチックやミネラルの分野と接触してアイデアをとることもできるのではないかと思います。また、そのような木材外の知識を吸収することによって逆に、木材が見えてくる、生きてくるといったようなことも考えられます。

従来からの市場についても、市場のニーズをしっかりつかんだ上でJISにこだわらず、エンドユーザーに直結するような製品を開発しなければならないと思います。

まあ、これからいろいろ問題がでてくると思いますが、問題がでてくればくる程、いろいろな分野で活躍できると思います。ひとつ試験場の人は、ロマンを持ってやって下さい。

(林産試 遠藤)

### 地場産業としてのボード工業

- 使われ方にあわせたボード作り -

岩倉組木材株式会社常務取締役  
会田 徹氏

### はじめに.....「放談」めきますが

新年あけましておめでとうございます。お正月という事で、多少、放談めいたことを申し上げるかもしれませんが、ひとつお許しを願いたいと思います。

私、学校を卒業して岩倉組へ入りまして以来、いつのまにか長くなってしまいました。現在の直接の仕事は、今年の秋をめざして、私共のパーティクルボード工場を臨海地域へ移設することです。移設といいますが、ほとんど新設ということになるのですが.....。その移設のためには、リレーのように、全力疾走して新工場へとバ

トンタッチすることが必要だと考えております。

全力疾走には、技術的な面も多くあるのですが、それにもまして関係者全員が、仕事に対する情熱や、信念を強烈に持つことが一番重要です。当然、無責任なことは、一言も言えない訳です。そして、その情熱や、信念をささえるのは、森林資源に対する信頼だと思っております。

ふりかえって、本道の林産業を見た場合、本年は特にきびしい、さらに言えば、社会全般に急速に価値感が変わってきており、林産業界はよくなって悪くてもそれに対処していかなければならなくなってきております。したがって、業界の頭脳としての林産試の立場は、非常に重要になってきます。

世の中は、不確実な、不透明な時代になってきたと言われておりますが、そのような時代ゆえこのことを業務の根底において、御精進していただきたい。